



春季観音大祭 紫燈護摩（火渡り修行）

観音

平成21年 3月
第43号

発行
広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-4
真言宗 正観寺
小出 真真 弘行

体あるものは、まさに心識を含み、

心あるものは必ず仏性を具す。

身体のあるもの、形のあるものは、動物植物鉱物に至るまで、心の働きをちやんともっている。その心をもっているものは、必ず仏様と成ることのできる美しい性質、立派な本性（仏性）をもっている。

拾遺雑集

合掌のかたちにつぼむ蓮かな

手は、そのしぐさで人のさまざまな表情や状態をあらわします。暇なときは「手が空き」、忙しいときは「手が離せない」。悪いことをすれば「手がうしろに回り」、高級車には「手が届かない」のに、五十歳にはもう「手が届く」。手を「貸したり借りたり」、手を「揉んで」愛想笑いしたり、その手のひらを「返す」ような態度もする。手を「焼かない」子もいれば、手に「負えない」子もいる……とまあ、こんな調子で、それこそ手が空く間なしです。

ところが、そんなに忙しい手も、これを合わせるときだけは、人を超えた世界を念ずる祈りのしぐさとなります。それが合掌ですね。手を合わせることは、まず向き合う相手に対して無防備になることです。さらに自分の身と心を手に集中し、自分をまるごと相手に差し出すことを意味するでしょう。手を自分のものでなくするということですね。

自分のものでなくする手（合掌）は何を意味するのでしょうか。その合わせた手は、蓮のつぼみとなるんですね。両手の内側が少しふくらみ、中指の先が少しだけ空いている形を蓮華合掌といいます。

すが、それは仏の心がまさに開花しようとしている姿です。

「合掌は蓮華のつぼみ」と言いましたが、拝むという「拜」は旧漢字で「拜」と書きます。「手」が手のそばにある形です。この手は、元は「華」（花のもの）と同じ形をあらわした字（象形文字）です。「拜」は、ヒトがひざまづいて手で華をつまむすがたを表しているということです。そうしますと、拝むことは花を捧げることであり、合掌して拝むことは、自分自身の蓮のつぼみ（仏性）を、仏さまに捧げようとする意味です。ところで、日本の踊り、またインド・中国・東南アジアの国々の舞踊や古典劇では、手のしぐさが大切な役割をはたしています。そのことと、仏像のさまざまな手の形とその美しさは関係があるように思います。

仏の世界もまた、手の形でさまざまに表現されています。それを印相といいますが、たとえば観音菩薩が左の手に、まだ開いてない蓮花を持ち、右の手を蓮のつぼみにかざしている姿があります。これは仏（悟り）が衆生（迷い）の内なる悟りを開かせようとしている働きを現わします。

手は、人の表情をあらわすとともに、それを通じて人間を超えた世界と交信する表現にもなるのです。